

資料 3

【発達障害児者地域生活支援モデル事業】
「ペアレント・トレーニングのプログラム作成に向けた調査・分析及びペアレン・トトレーニングファシリテーター養成講座の実施」
の検証について

令和5年度 発達障害児者地域生活支援モデル事業報告

令和6年2月21日

【事業目的】

・大阪市では、平成26年度より幼児期・学齢期(低学年・高学年)、思春期と年代別にグループ編成したペアレント・トレーニング(以下PTと略す)を実施してきた。昨年度は、「PT基本プラットフォーム」を応用した幼児版PTのプログラムの作成と、参加者への事前事後アンケートによる効果検証に加え、ファシリテーター経験者が新人ファシリテーターにスーパーバイズする体制や手法を整えた。今年度は、参加者の発言を記録・整理し、年代によって話題に変化があるのか、何らかの傾向があるのかを探索的に調査を行い、地域でPTを実施する際の年代毎の課題などを整理するとともに、ファシリテーター養成講座を実施し、地域でファシリテーターを増やすために必要な取り組みや、地域の事業所にどのようなニーズがあるのかを調査する機会とする。

1. ペアレント・トレーニングのプログラム作成に向けた調査・分析

【実施期間・参加者・使用するプログラム】

- ・グループ実施期間 令和5年5月10日～令和6年3月7日
- ・参加者 市内在住で、発達障がいの診断がある(疑い含む)お子さんの保護者(合計45人)
 - 幼児期(年少～年長児)：2グループ 10人
 - 低学年(小学1年～3年)：2グループ 14人
 - 高学年(小学4年～6年)：2グループ 15人(1グループ:8人実施中のため分析途中)
 - 思春期(中学生)：1グループ 6人(実施中のため分析途中)
- ・プログラム内容 幼児期：昨年度のモデル事業の成果物である「基本プラットフォーム」を応用したプログラム
低学年・高学年・思春期：奈良式のプログラム

【調査・分析方法】

- ・調査方法：事前に参加者に調査に関する説明を口頭と書面で行い、同意書に署名をもらった(参加者全員に同意を得られた)。PTに同席するサブスタッフが、参加者の発言内容を共通の記録シートに記録した。
- ・分析方法：PTの進行に伴う個人の継時的な変化について記録データを質的データ分析すると共に、どの様な話題が出たかをライフスキルの項目(WHOと梅永雄二氏の分類を参考)を中心に分類して、各年代毎の特徴を整理した。

「ペアレント・トレーニングのプログラム作成に向けた調査・分析」及び 「ペアレント・トレーニング ファシリテーター養成講座の実施」

【各年代の特徴】

	幼児	低学年（小1～3年）	高学年（小4～6年）	思春期(中1～3年)
参加者の特徴	親としての役割を上手くはたせず挫折、 自信喪失した状態で、焦りや危機感を抱いて参加	「保護者自身が子への関わり方を変えたい」という希望を持っているグループと「子どもの行動が変わってほしい」という期待が強いグループに大別	不登校や登校渋りが増え、これまでの子育てに不全感を抱きやすい。 子ども自身が集団の中で生活する力を最低限身につけてほしい という切実な願いを持っている	定期テストや課題の提出で評価にさらされるプレッシャーを感じている。不登校の場合は、不登校の長期化に焦りと不安を抱いている。 子どもが社会に出てやっていけるのかという不安が顕在化しやすい
ニーズ	「親として子どもを受け止めたい」「上手く関わりたい」「自分の感情をコントロールできるようになりたい」	「子どもを理解できるようになりたい」「子どもを支えられる親になりたい」「子の特性を受け入れたい」「怒る自分から脱却したい」	家庭におけるライフスキルや、家庭を通じた社会参加の準備のサポート	
話題	・身辺自立：トイレ・歯磨き・着替え・食事など、できない事を出来るようサポートする関わりが主となる。一連の流れ（登園準備、帰宅後、入浴、食事、就寝、等）がスムーズにいかない話題も頻発。	・宿題：子どもに宿題をやらせる為の関わりに苦悩しており、宿題に関する話題が目立つ。 ・パートナー：参加者のパートナーに関する話題もあがり、PTに参加して変わりつつある自分と変わらないパートナーとの関係性が出やすい。	・不登校：低学年に比べて宿題に関する話題が減り、不登校や登校渋りに関する話題が増える。 ・母子関係：低学年に比べてパートナーへの言及は減るが、母子関係を表す話題が増える。 ・身辺自立：生活の乱れやマナーに関する話題が増える ・意思決定/問題解決：子ども自身が周囲に自分の意思を伝えたり、問題を解決する事に関する話題が増える	・不登校：不登校の長期化により、人間関係が家庭内のみとなる。 ・定期テスト/課題：内申点に直結するテストや課題提出に関する話題が目立つ ・思春期特有の問題：親への反抗的な態度や、部屋に籠る、部屋に入るだけで怒る、等、思春期特有の問題 ・身辺自立：生活の乱れやマナーに関する話題
PT効果	落ち着いて客観的に子どもを見るようになり、感情的に巻き込まれない対応ができるようになった。	子どもへの肯定的な理解と対応をとれるようになるが、「保護者が変わったいグループ」の効果が早く現れ、「子どもに変わってほしい」グループは遅れて現れた。	子どもへの肯定的な理解と対応をとれるようになると共に、 「ライフスキルを子ども自身が身につける必要性を認識するようになった」	

【課題】

・PT連続講座では、年代によってニーズや出てくる話題に特徴があることを整理した。ファシリテーターがその特徴を把握して、各年代に応じたファシリテーションをするため、幼児期には「親としての自信を回復する関わり」、低学年には「保護者自身が変わる必要性を認識できるような関わり」、高学年には「子ども自身がライフスキルを身につけるために家庭内でサポートできるような関わり」を検討することが必要となる。

2. ペアレント・トレーニング ファシリテーター養成講座の実施

【実施概要】

- ・日時:2023年12月4日、11日(月) 10:00~16:00
- ・場所:JEC日本研修センター心斎橋
- ・講師:森千夏先生(大阪大学キャンパスライフ健康支援・相談センター)、松村奈々子先生(平谷こども発達クリニック)
- ・グループワークのファシリテーター:森千夏先生、松村奈々子先生、エルムおおさか職員

【参加者】

- ・対象:大阪市内で発達障がい児支援に携わっている児童発達支援センター・児童発達支援・放課後等デイサービスの職員で、PTを実施する予定のある事業所を優先。
- ・参加人数:14人(児童発達支援センター5人・児童発達支援・放課後等デイサービス9人)
- ・参加者の属性
 - 資格:児童発達支援管理責任者1人、保育士9人、社会福祉士2人、児童指導員等2人
 - 支援経験年数:1~5年3人、6~10年3人、11~15年4人、16~20年2人、21年以上2人

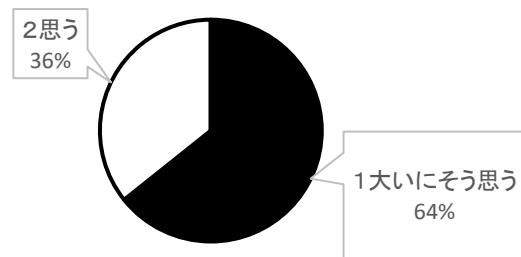
【実施方法】

- ・日本ペアレント・トレーニング研究会が主催するファシリテーター養成講座と同様の内容で実施
- ・事前課題として、オンデマンド動画視聴(約1時間)とワークシート(8枚)を実施のうえ、参加
- ・講座当日は、全体講義と、グループワーク(4~5人×3グループ)を実施
- ・最終日に、アンケート・修了証・エルムおおさかが作成した幼児版プログラム(昨年度のモデル事業の成果物である「基本プラットフォーム」を応用したプログラム)を配布
- ・日本ペアレント・トレーニング研究会から、アンケートと基本プラットフォームの資料のダウンロードを案内

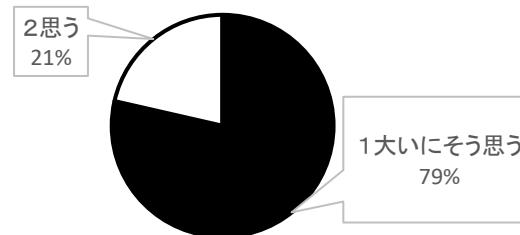
【アンケート結果】

- ・参加者14名にアンケートを実施(回収率100%)
- ・問1～4は、「大いにそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」、の5件法で回答
- ・問5は、「自身の機関で実施できると思うか」の問い合わせ、「できる」「援助があればできる」「難しい」、で回答

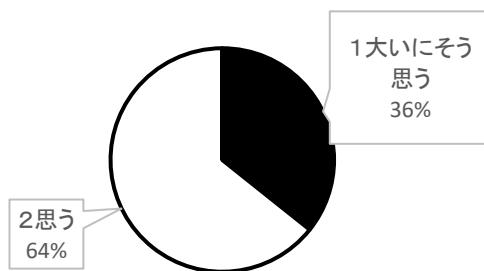
1.満足しましたか



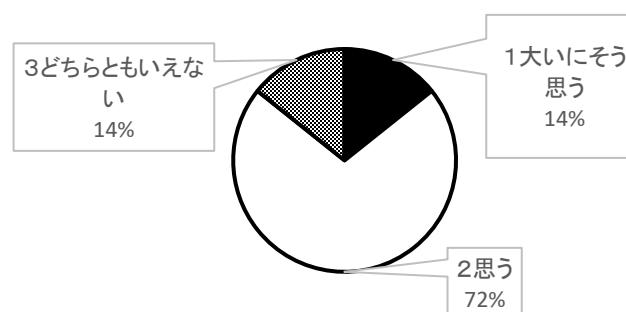
2.わかりやすかったですか



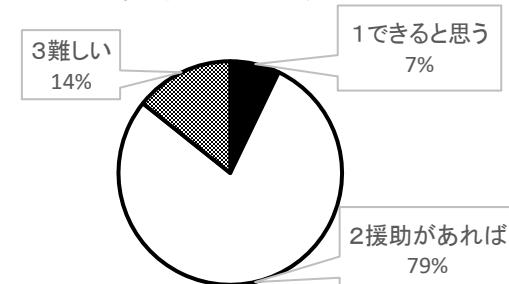
3.知識・技術の習得はできましたか



4.実施するイメージをもてましたか



5.実施できますか



講座に対する満足度や理解度は高く、ファシリテーターに必要な知識や技術も習得できたという結果となり、講座の目的は達せた。しかし、実際にPTを実施するには、何らかのサポートが必要だという事が明らかになった。

【アンケート結果】

- ・問5で「援助があればできる」とした参加者に、どんな援助を希望するかを自由記述で回答してもらい、必要なサポートをまとめた

連続講座の体験	見学	5
	サブスタッフ体験	3
コンサルテーション	対象の検討、プログラム調整、募集方法、等のサポート	4
	スーパーバイザー	4
	ファシリテーター派遣	2
	連絡会・勉強会	2

【グループワークやアンケート感想欄での質問・意見の内容】

- ・運営方法に関する質問や意見： 実際の予定を組み周知して開催するサポートが欲しい、どのようにスケジュールを組むのか、スタッフの役割分担はどうするのか、重度知的障がいで言葉の出てない利用者が多いので自施設にあったプログラムがあるのか、等
- ・ファシリテーションに関する質問や意見： 対応が難しい参加者(参加への動機が低い、自分の事を話しすぎる、ロールプレイが苦手、宿題の実施が難しい、等)への対応方法はどうすれば良いか、思春期グループではどんな傾向があるか、宿題へのフィードバック方法はどうするのか、参加者の話のどこに焦点を当てれば良いか、個別相談とグループの違いは、等

【課題】

- ・ファシリテーター養成講座では、基本プラットフォームに関する知識やファシリテーターの技術を学ぶことができるが、講座を受講しただけでは自施設での実施が難しいことがアンケートから明らかになった。実際のPT連続講座の見学やサブスタッフの体験、運営方法に関するコンサルテーションやスーパーバイズを受ける機会を提供する仕組みを構築することが必要である。